

1. オリエンテーション、導入——聖書と聖書学・考古学
- 2～7. 旧約聖書——宗教史的背景、創造、契約、王権、預言、知恵
8. 新約聖書1——新約聖書学
9. 新約聖書2——神の国
10. 新約聖書3——イエスの譬え
11. 新約聖書4——富
12. 新約聖書5——国家 7/8
13. 新約聖書6——グノーシス
14. 受講者による研究発表1 7/15
15. 受講者による研究発表2 7/22
16. フィードバック

<前回>イエスの譬え

(1) 「イエスの譬え」解釈史——聖書から宗教改革へ

1. アレゴリカルな解釈 (寓意的解釈)・新約聖書の「譬え論」
 - ・アレゴリカルな解釈は新約聖書自体に遡る。マルコ福音書(マルコ 4.10-13)の譬え論
 - ・アレゴリカルな解釈の本質と問題性
 - a. 「共同体の外部と内部の区別」は譬え解釈に次のような役割を与える。
 - b. 隠喩の代置理論(Substitution Theory)：暗号と暗号解読
4. 教義的解釈 (教義の読み込み・教義の枠組みにおける読解)
 - アウグスティヌスの場合 (Quaestiones Evangeliorum 2.19)：
5. 宗教改革とアレゴリカルな解釈の克服
 - (1) 宗教改革の原理と霊的意味の探求との関わり
 - 歴史的・字義的意味 (→近代聖書学) から解釈学的プロセスの終点へ
 - (2) ルターの聖書解釈におけるアレゴリーの扱い方の両義性
 - アレゴリカルな解釈の適用と放棄

(2) 近代聖書学とイエスの譬え——イエスの譬えの歴史性

6. Adolf Jülicher, *Die Gleichnisreden Jesu. Zwei Teile in einem Band*, Darmstadt
 - ・アレゴリカルな解釈からの決別 → 譬えの歴史性と文学性
 - ・隠喩の代置理論、アリストテレスの修辞学 → 文学性の理解における限界
 - ・イエスの譬えはアリストテレス的な修辞学とは別の法則性の基づいている。
7. ブルトマン、ドッドからエレミアス
 - ・歴史性への過度の集中、歴史への偏重
 - 文学的・言語的な分類の問題は歴史的社会学の問題設定に従属している。

(3) エレミアス以降の譬え解釈——歴史から構造、言語自体へ

(4) イエスの譬えから、神の国の現実性へ、あるいは人間存在の時間性

<イエスの譬え解釈の前提・仮説>

- 1) イエスの宗教 (宗教運動と宗教思想) の解明について
- 2) イエスの宗教の核心点としての「神の国」のリアリティー (終末論的宗教)
- 3) イエスの譬え研究の意義
 - ・ 神の国の譬えから神の国のリアリティーを理解すること
 - 譬えの語りと読解において、神の国がいかなる仕方で我々の了解へと到来するのか (言葉の出来事)、それは何を (信仰のダイナミズム) 引き起こすのか、神の国とは何か。というよりも、神の国は何をもたらし何を引き起こすのか、どこで神の国の到来を知るのか?

<解釈学的プロセス> → プロセスの反復

<読解プロセスと信仰との対応>

- 5) 古い存在から新しい存在へ転換 (Old Being → New Being)：
 - 1) イエスの宗教運動：
 - 「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」(マルコ 1：15)
 - 神の国の接近→「悔い改める」という存在転換→イエス運動の内実
 - 2) ヨハネによる福音書の信仰論

8) 回心のプロセス

(5) 「放蕩息子の譬え」

① テキスト形成に関わる先行理解 (聖書学)

1. 文学批判1 : 二資料仮説との関わり、二部構成の理解、テキストの範囲の確定
2. 歴史批判 :
 - ・ 社会構造 : 甚だしい貧富の差、階層格差の存在。
 - ・ 財産分与の法的背景 :
 - ・ 論争というルカの状況設定とイエス運動の歴史的事実
3. 聴衆にとっての神の国 :
4. テキスト形成の先行理解の解明 : 「浄-不浄」の社会コード、因果応報

② 読者の先行理解 (文学批判2)

1. 神の国の譬え : 読者、解釈者は、イエスの譬えを「神の国」との連関で理解しようとする。つまり、譬えの指示対象は「神の国」の現実である。
2. 「浄-不浄」の社会コードに相当するコード、因果応報
3. 人生と自己責任 (個人主義・世俗主義)

③ 行為体分析

逆転構造、開かれた物語 (結末がない?) :

④ 聴衆・読者の読解プロセス → 隠喩過程 (解決の奇抜さ→驚き)

聴衆・読者の視点は?

⑤ ミメシス3

1. 逆転構造に対応した内容

こんな父親は存在するか?

聴衆の驚きは、読者にとっていかに再現されるか → イメージは思考を刺激し自己反省の回路を開く

2. 愛の過剰・神の国の祝祭

父の愛は、弟と、聴衆の、読者の、期待を超えて、思いがけず到来する。

この過剰な愛は、人間関係の現実性を浮かび上がらせる。

この状況の中に、神の国 (恩恵・救い) は存在を肯定できない敵を救済しつつ到来する

3. 人間の状況

- ・ 回心 : 死から生 (再生) へ、では兄は?
- ・ 人間の罪 (自己疎外) の二つの形態 → 影
- ・ 現代の読者 : 自分はどこにいるのか。受け入れがたい自己の姿
自分にとって回心とは? 果たしてそれは期待できるか?
「(あなたは) どこにいるのか」(創世記3:9)
「(わたしは) ここにいます」(サムエル記上3:4)

⑥ 解釈学的プロセスから思想へ

1. 神の国とは → イエスの宗教運動 (教え、論争、共食、癒し)

信仰 : 神の国へと開かれた生、生の開放性の共同体

特定の固定化された内容に重点があるわけではない

期待を遙かに超えた驚くべき喜び・応答 : 死から生へ、因果応報を超えて

兄の存在理由 : 神の国の祝祭ははじまったばかり、まだ和解してい

ない人がいる。兄との和解は未決である (=歴史の未決性)。

歴史における神の国の断片性

2. キリスト教は他の諸宗教をいかに理解するのか

3. 神と人間との関係 : この譬えの読解における父と子のアナロジー (家族というメタファーの射程)

11. 新約聖書4——富

(1) 宗教と経済、問いの所在

信仰は単なる内面の事柄か？ 心の問題か？

1. 宗教と経済は、宗教思想にとって、いわば隠れた問いである。「欲望」という問題。

・近代キリスト教思想の前提 → 宗教の内面化・精神化＝私事化

聖と俗の二分法：宗教と経済を分離する暗黙の思考法

本来の宗教、キリスト教は、御利益宗教ではない。魂・心情の純粋さが宗教の真髄である。

しかし、献金とは、経済的な側面を有さないのか、聖職者は、実質的に職業化しているのではないか。建前論を超えられない、宗教の抽象的な議論。

・現実の宗教を批判的に分析する際に、この二分法には、限界がある。

↓

経済・富・欲望は、キリスト教にとって、常に隠れた争点として存在した。

この経済と宗教とのリンクにこそ、宗教の根本的問いがある。

聖書の富者批判、愛の共産制、修道制の成立と展開、宗教改革、土着化など
まず、ここに問題の核心が存在することを認めるところから出発するとどうなるか。

2. 経済と環境は切り離せない

・ Sallie McFague, "God's Household: Christianity, Economics, and Planetary Living," in: Paul F. Knitter & Chandra Muzaffar (eds.), *Subverting Greed. Religious Perspectives on the Global Economy*, Orbis Books, 2002.

Abstract

Religions help us from the basic assumptions about what we are and how we should act in the world. Presently, two worldviews with accompanying economic rules for planetary living vie for our loyalty. One is the neoclassical market model with its ideology of greed and its goal of growth: the consumer society. The other is the ecological economic model with its creed of interdependence and its goal of planetary sustainability: the just society. Many Christians, particularly middle-class North Americans, are presently captive to the first model. Christianity should, however, advocate the second model --- the one that sees the good of all beings, including human beings, as dependent on a sustainable planet where resources are justly distributed. The ecological economic model is not Christian economics; rather, it is an economic model that faintly resembles the radical inclusiveness and open table of Jesus' Kingdom of God. It is better than the market model for human beings and the planet. It is also a more appropriate one for Christians to support. (119)

Neoclassical and ecological economics

The two worldviews --- neoclassical economic(s) and ecological economic(s) --- are dramatically different;

Both are models, interpretations of the world and our place in it: neither is a description of fact. (124)

Contemporary neoclassical economics, however, generally deny that economics is about value. But this denial is questionable.

At the base of neoclassical economics is an anthropology: human beings are individual motivated by self-interest.

Neoclassical economics has one value: the monetary fulfillment of individuals provided they compete successfully for the resources. (125)

the view of human nature is individualism and the goal is economic growth.

we turn to the alternative ecological economic paradigm

Ecological economics claims we cannot survive... unless we acknowledge our profound dependence on one another and the earth.

sustainability and distributive justice (126)

John Dominic Crossan: "The open commensality and radical egalitarianism of Jesus' kingdom of God are more terrifying than anything we have ever imagined, and even if we can never accept it, we should not explain it away as something else" (Crossan, 1994, 73-74) (130)

3. マクフェイグに対して

- ・エコロジカルな経済学の内実あるいは詳細は？
- ・エコロジカルな経済モデルを支える人間理解は、現代の自由主義対共同体主義という論争において共同体主義の立場に立つことになるのか？
- ・問題のグローバルな性格と多元的な取り組みという構図を描くことは可能か？ どこに多角的な諸立場がコミュニケーション可能になる地平を見出しうるのか？ (自然神学?)
- ・単一の聖書的経済学ではなく、諸経済学の共有する方向性？

(2) 聖書の宗教と経済との多様な関連性

4. 預言者・黙示文学の伝統における富者批判

1) 預言者の富者批判・弱者の視点、正義＝神の下の平等

「災いだ、偽りの判決を下す者、労苦を追わせる宣告文を記す者は。彼らは弱い者の訴えを退け、わたしの民の貧しい者から権利を奪い、やもめを餌食とし、みなしごを略奪する。」(イザヤ 10.1-2)

2) 黙示文学：富める者の不正はこの世界の悪の支配の徴。神の国ではこの秩序は逆転。

「わざわざいなるかな、きみたち富める者。きみたちは、自分の富を頼みとした。しかし、きみたちは、自分の富を失うであろう」(エチオピア語エノク 94.8)

3) 富者を批判するイエス

・「貧しい人々は、幸いである。神の国はあなたがたのものである」、「しかし、富んでいるあなたがたは、不幸である。あなたがたはもう慰めを受けている。」(ルカ 6:20-25)

4) 初期キリスト教会と愛の共産主義 (財産の共有)

「信じた人々の群は心も思いも一つにして、一人として持ち物を自分のものだと言う者はなく、すべて共有していた。」(使徒言行録 4:32)

5. 物質的な豊かさは神の祝福。→ 因果応報と核とする慣習的共同体的な知恵！

(1) 「主がわたしの主人を大層祝福され、羊や牛の群れ、金銀、男女の奴隷、らくだやろばなどをお与えになったので、主人は裕福になりました。」(創世記 24.35)

(2) 「もし、あなたがあなたの神、主の御声によく聞き従い、今日わたしが命じる戒めをことごとく忠実に守るならば、あなたの神、主は、あなたを地上のあらゆる国民にはるかにまさったものとしてくださる。あなたがあなたの神、主の御声に聞き従うならば、これらの祝福はすべてあなたに臨み、実現するであろう。あなたは町にいても祝福され、野にいても祝福される。あなたの身から生まれる子も土地の実りも、家畜の産むもの、すなわち牛の子や羊の子も祝福され、籠もこね鉢も祝福される。あなたは入るときも祝福され、出て行くときも祝福される。主は、あなたに立ち向かう敵を目の前で打ち破られる。敵は一つの道から攻めて来るが、あなたの前に敗れて七つの道に逃げ去る。主は、あなたのために、あなたの穀倉に対しても、あなたの手の働きすべてに対しても祝福を定められ、あなたの神、主が与えられる土地であなたを祝福される。」(申命記 28.1-8)

(3) 「主はその後のヨブを以前にも増して祝福された。ヨブは、羊一万四千匹、らくだ六千頭、牛一千くびき、雌ろば一千頭を持つことになった。彼はまた七人の息子と三人の娘をもうけ、長女をエミマ、次女をケツィア、三女をケレン・プクと名付けた。ヨブの娘たちのように美しい娘は国中どこにもいなかった。彼女らもその兄弟と共に父の財産の分け前を受けた。ヨブはその後百四十年生き、子、孫、四代の先まで見ることができた。ヨブは長寿を保ち、老いて死んだ。」(ヨブ 42.12-17)

(4) 「主を畏れて身を低くすれば／富も名誉も命も従って来る。」(箴言 22.4)

(5) 「神から富や財宝をいただいた人は皆、それを享受し、自らの分をわきまえ、その労苦の結果を楽しむように定められている。これは神の賜物なのだ。」(コヘレト 5.18)

6. 聖書における富の問題の多様性について

聖書における富の問題に関して、まず確認すべき点は、聖書には富に対する統一見解など存在しないということである。旧約聖書においては、一方に、富を神からの祝福とする考えが存在するが——知恵文学には、不正な富の獲得は別にして、富自体を肯定的に捉える言葉が散見される——、しかし他方、預言書や黙示文学には、貧富の格差や不正という観点からの富あるいは富者に対する強烈の批判が見られる。新約聖書においても、旧約聖書の富者批判を受け継いだ議論（福音書、ヤコブ書、ヨハネ黙示録）から、富自体よりもむしろ富に固執する欲望を批判する議論（パウロ書簡、牧会書簡）まで、様々な見解が存在する。

・ Ben Witherington III, *Jesus and Money. A Guide for Times of Financial Crisis*, Brazos Press, 2010)

Sondra Wheeler

Jewish literature is not simply all in favor of wealth and abundance. And the New Testament is not simply all against having possessions and some prosperity in life. The evidence is more mixed and complex.

Wheeler summarizes what the Old Testament says about wealth and abundance under four headings:

1. Wealth as an occasion for idolatry (Deut.32:10-18; Isa.2:6-8;3:16-24; Jer.5:7; Ezek.7.19-20; 16:15-22; Hos.2:5-9; Amos 6:4-7) The prophets warn about the dangers of wealth leading to idolatry,

2. Wealth as the fruit of injustice (Isa. 3:14-15; 10:1-3; Mic.6:10-12; Jer.5-27-28; Amos 2:6; 4:1-2)

3. Wealth as a sign of Faithfulness (Lev.26:3-10; Deut. 11:13-15; Isa.54:11-12; 60:9-16; Jer.33:6-9)

4. Wealth as the reward for hard labor (Prov.10-21). In the Wisdom literature, labor and its rewards are often contrasted with Laziness. (13)

What, then, are the basic themes on wealth in the New Testament? Wheeler again lists four:

1. Wealth as a stumbling block (Luke 18:18-30)

2. Wealth as a competing object of devotion. In the Gospels, when a person becomes too attached to possessions, a choice is forced, since one cannot serve both God and Mammon (Matt. 6:24; Luke 16:13)

3. Wealth as a resource for human needs. This is a very persistent theme in the New Testament. (14)

4. Wealth as a symptom of economic injustice.

Sondra Wheeler's discussion is a good reminder of that diversity. (15)

7. 現代の思想的文脈

富の問題は、キリスト教をその現実性に即して問う場合に避けて通ることができない。特に 1990 年代以降の冷戦後の世界において、キリスト教は様々な対立と紛争に関与するものとしてしばしば批判されてきたが、そこには、経済的要因が深く複雑に絡み合っており、こうした議論に対して有意味な論究を行うには、聖書と経済・富との関係を整理することが必要である。

近年、新自由主義的な経済政策の妥当性への疑いが様々な立場から提起されるようになっている。特に問題は、新自由主義的経済と環境危機との関連性である。

8. Witherington

Why a book on money, and why now? Because our economy is in a free fall. . . . we now have to learn to live with less. ... Maybe now is a good time --- even a necessary time --- to reconsider what money means to us and how we use it (and are used by it), and especially to look anew at what Jesus and his earliest followers really taught about wealth and possessions. (7)

9. 「聖書における富の問題に関して、まず確認すべき点は、聖書には富に対する統一見解など存在しないということである。旧約聖書においては、一方に、富を神からの祝福とする考えがあり——知恵文学には、不正な富の獲得は別にして、富自体を肯定的に捉える言葉が散見される——、他方、預言書や黙示文学では、貧富の格差や不正との関連における富あるいは富者への強烈の批判が見られる。新約聖書においても、旧約聖書の富者批判を受け継いだ議論（福音書、ヤコブ書、ヨハネ黙示録）から、富自体よりも富に固執する欲望へと批判の論点を移す議論（パウロ書簡、牧会書簡）まで、様々な見解が存在する。

見解の多様性を認めた上で、聖書全体に関しては次の点が指摘できる。(1)不正義や過剰な欲望と結びつく富は否定される。(2)富あるいは富者についての論評は、共同体（たとえば教会）が置かれた社会的文脈と相関的である。共同体が社会の経済的政治的な権力構造との関わりを深めるについて、富自体への否定的見解は後退する傾向が見られる。」（「富」『キリスト教平和学事典』教文館、2009年）

（3）イエスの譬えと経済—ぶどう園の労働者—

<「ぶどう園の労働者」の譬え（マタイ 20:1-16）>

20:1 「天の国は次のようにたとえられる。ある家の主人が、ぶどう園で働く労働者を雇うために、夜明けに出かけて行った。2 主人は、一日につき一デナリオンの約束で、労働者をぶどう園に送った。3 また、九時ごろ行ってみると、何もしないで広場に立っている人々がいたので、4 『あなたたちもぶどう園に行きなさい。ふさわしい賃金を払ってやろう』と言った。5 それで、その人たちは出かけて行った。主人は、十二時ごろと三時ごろにまた出て行き、同じようにした。6 五時ごろにも行ってみると、ほかの人々が立っていたので、『なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか』と尋ねると、7 彼らは、『だれも雇ってくれないのです』と言った。主人は彼らに、『あなたたちもぶどう園に行きなさい』と言った。8 夕方になって、ぶどう園の主人は監督に、『労働者たちを呼んで、最後に来た者から始めて、最初に来た者まで順に賃金を払ってやりなさい』と言った。9 そこで、五時ごろに雇われた人たちが来て、一デナリオンずつ受け取った。10 最初に雇われた人たちが来て、もっと多くもらえるだろうと思っていた。しかし、彼らも一デナリオンずつであった。11 それで、受け取ると、主人に不平を言った。12 『最後に来たこの連中は、一時間しか働きませんでした。まる一日、暑い中を辛抱して働いたわたしたちと、この連中とを同じ扱いにすることは。』13 主人はその一人に答えた。『友よ、あなたに不当なことはしていない。あなたはわたしと一デナリオンの約束をしたではないか。14 自分の分を受け取って帰りなさい。わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。15 自分のものを自分のしたいようにしては、いけないか。それとも、わたしの気前のよさをねたむのか。』16 このように、後にいる者が先になり、先にいる者が後になる。」

10. 0) 予備的考察：解釈されるべき譬えの範囲：1b-15、但し、1a はイエス自身の枠組みと考えてよい。
11. 1) 歴史性：イエス時代の農業労働者の現実（日雇いの労働にありつける保証はない→「罪人」）。1 イデナリオンは一日の賃金として標準的。
12. 2) 文学性：
- ・ 構造：1a

| | |
|------------------|--------------------|
| 1b-2 / 3-5 / 6-7 | 最初に雇われた人：悲劇（上昇→下降） |
| 8-9 / 10 | 最後に雇われた人：喜劇（下降→上昇） |
| 11-12 / 13-15 | |
 - ・ 読解プロセス（聴聞プロセス）：聞き手は、自分の体験で物語の進行をリアルに理解できる、あるいは自分自身の体験と重ねることができる。
13. 3) 思想性：「神の国の譬え」という視点で何がわかるか。
- ・ 最初に雇われた労働者の不満＝聞き手の不満

- ・イエスの答えに設定しての驚き
社会的慣例（労働時間に比例した賃金）の無視とも見える主人の気前よさ
- ・神の国とは何か。
神の驚くべき恩恵（一方的な贈与）。神の国に入ることは喜ばしい驚きである。

↓

14. 3) 思想から行動（倫理）へ

- ・聞き手自らの状況についての批判的な反省
神の国の恩恵的性格と制度化の関わり。
神の国は制度の枠組みを超過している（＝気前よさ、開かれた食卓はここに生成する）。しかし、この気前よさは人間社会の中に制度をもたらさないか。
- ・神の国は、特に社会的弱者にこそ開かれている。神の国の弱者への共感。
公平・正義とは、機械的な平等か。最低限の生活の保証が優先する。
- ・「最低限度の人間らしい生活を保証する制度」の意義。
制度になることによって、それを悪用する人々は出てくる。しかし、それはこうした制度の存在意義を否定する者ではない。→ 近代の福祉国家の基本理念！
生活保護は、神の恩恵の制度化ではなかったのか。しかし、それを悪用する人間も生じる。

（４）パウロの共同体と経済

- ・ Richard A. Horsley, *Covenant Economics. A Biblical Vision of Justice for All*, Westminster/John Knox Press, 2009.

Part 2: The Renewal of Covenantal Community

The Assemblies of Christ in the Letters of Paul

The movement, beyond Galilee

the assemblies of Christ were communities with political-economic aspects inseparable from the religious aspect. (135)

Most significant economically, members of the assemblies of Christ were city dwellers, not peasants, and were slaves or artisans or underemployed wageworkers, not farmers in an agrarian village. (136)

New Testament scholarship has tended to construct a general synthetic picture of the "Hellenistic world" of the Greek cities in which the apostle Paul carried out his mission and early "Gentile Christianity" developed. (137)

ekklesia, assembly, a network of smaller household-based communities

a nascent alternative society that separated itself from the dominant imperial society as much as possible. (140)

（５）黙示論と経済

- ・ Barbara R. Rossing, "'River of Life in God's New Jerusalem, An Eschatological Vision for Earth's Future,'" in: Dieter T. Hessel and Rosemary Radford Ruether (eds.), *Christianity and Ecology*, Harvard University Press 2000.
15. ロッシングの問題意識：黙示録を非環境論的であると解釈する（黙示録への懐疑論）のとは別の解釈の可能性、むしろ、ヨハネ黙示録を環境論者でフェミニストの新約聖書学者として積極的に読解することを目指している。「黙示録の目的は人々に強く勧め勇気を与え、神の審判と救済を宣言し、希望と正義のヴィジョンをもたらすことなのである。」(207)
16. そのためにロッシングが注目するのは、黙示録が提示する、バビロンとエルサレムという対照的な二つの都市のヴィジョン、二つの対照的な政治経済学のヴィジョンである。
17. ローマ帝国の「現実化した終末論」（永遠のローマ、ローマの平和）。

- ローマ帝国のグローバルな全能性は地中海の海洋交易が支えていた。黙示録は、このローマの全能と永遠性を転倒している。
- ・都市の女性的形姿（人格化）による描写。「その主要な論争は、政治的で経済的であり、性差に関わるものではない。」(209)
 - ・バビロンの政治経済学、バビロンの環境破壊。
「バビロンの売春の対する黙示録の批判は、性的ではなく、ローマの搾取的な貿易と経済支配に対して隠喩的に向けられている」(209)、「奴隷制と奴隷交易に対するもっとも明確な批判」
 - ・森林伐採、「裸の荒地」(17:16)
68-70年のユダヤ戦争についてのヨセフスの証言。
ローマは征服された土地を森林伐採した。グローバルな森林伐採。
18. バビロンに対する新しいエルサレム、「もはや海はない」(21:1)
- 「神話論的な恐れ」は、黙示録にとって、海の主要な批判ではない。「黙示録は海を政治的に描いている」、「悪の場所」「交易船が航海する場所」
「もはや海はない」＝「ローマの貨物船と交易の終わり」
- ・別の経済的ヴィジョン、新しいエルサレム（生命の都）は環境論的。
「テキストがわれわれに呼び起こすのは、都市的で環境的な危機、グローバルな市場経済の危機のただ中における神への信頼である。」(214)
 - ・地上における神の家、都市生活のヴィジョン
地上からの脱出（携挙）ではなく、新しいエルサレムは「降りてくる」。都市的ミニストリの新しいヴィジョン
 - ・贈与的経済（a gift economy）：生命の水をすべての人に値なく飲ませる。われわれがエコシステムに対してダメージを与えることへの預言者的な批判
 - ・エゼキエルの新しい神殿のヴィジョンの拡張。
都には神殿がない(21:22)。神の現臨は神殿に限定されない。全被造物に広がる。
新しいエルサレムは人々を歓待する快適な都市
 - ・諸民族の癒やし。創世記3:22の禁止命令を克服する生命の木のヴィジョン。
 - ・新しいエルサレムは未来のためのヴィジョンである。
「わたしたちは、よりよい近隣、聖なる都を描きながら希望を持ち続けねばならない。」(219)

<参考文献>

1. 田川建三 『キリスト教思想への招待』新教出版社。
2. M.ヘンゲル『古代教会における財産と富』教文館。
3. 山本栄一『問いかける聖書と経済』関西学院大学出版会。
4. Max L. Stackhouse, *Covenant & Commitments. Faith, Family, and Economic Life*, Westminster / John Knox Press, 1997.
Introduction
1. Sex and Marriage: An Intense Debate
2. Household and Work: On Sex, Economics, and Power
3. Home and Religion: Sharing and Home Life
4. Welfare and Children: The Family in State and Society
5. Covenant and Love: What Have We Done?
5. Paul Tillich, *Love, Power, and Justice. Ontological Analyses and Ethical Applications*, 1954, in: Paul Tillich. *Main Works* 3, pp.583-650.
6. Richard A. Horsley, *Covenant Economics. A Biblical Vision of Justice for All*, Westminster/John Knox Press, 2009.